

ダニエルの書 - 第40号

ポール

Jeff Pippenger

2024-01-04

ダニエル書第1章は、第4章と重ね合わせると、1798年から1844年に至る第一の天使と第二の天使の歴史を表している。その歴史においてダニエル書の封印が解かれ、解かれた部分は第7章、第8章、第9章であった。「Line upon line」により、第1章、第4章、そして第7章から第9章は、第一の天使のミラー派運動の歴史を例証している。

その時代（1798年から1844年）に、アドベンチズムの基礎的真理が確立され、それらの真理は最終的に1843年のパイオニア図表に表された。ダニエル書2章のネブカドネザルの像がその図表に描かれている。ダニエル書7章と8章の幻も描かれている。8章の「The daily」が示され、レビ記26章の「七度」も同様である。黙示録9章に表されているイスラムの三つの災いもそこにある。神は、それらの基礎的真理が攻撃されることを繰り返し前もって警告された。

シオンの城壁の上で神の見張り人として立つ者たちは、民の前にある危険を見通すことのできる人々、真理と誤り、義と不義を見分けることのできる人々であれ。

「警告が与えられました。1842年、1843年、1844年にこのメッセージが与えられて以来、私たちが築いてきた信仰の土台を乱すものを、何一つ入り込ませてはなりません。私はこのメッセージに関わっており、それ以来ずっと、神が私たちにお与えになった光に忠実に、世の前に立ってきました。日々、切なる祈りをもって主を求め、光を求めながら、私たちの足が据えられたその土台から退くつもりはありません。神が私にお与えになった光を、私が手放すと思いますか。それはとこしえの岩のようであるべきものです。与えられて以来、ずっとそれが私を導いてきました。」レビュー・アンド・ヘラルド、1903年4月14日。

塵払いの男の働きは、神の終わりの日の民の参加によって成し遂げられるべきものだが、イザヤは終わりの日の民と彼らに与えられた務めを指し示すことで、その働きをも表している。というのも、終わりの日が到来する前に、土台は誤りによって埋もれてしまう運命にあったからである。

あなたの中の者は、昔からの荒れ跡を建て直し、代々の基を築き直す。あなたは「破れを繕う者、道を直して住めるようにする者」と呼ばれる。イザヤ書 58:12

「古い荒れ跡」とは、異教と教皇制という二つの荒廃させる勢力に関わる教理的真理を指す。異教の荒廃させる勢力の後に教皇制の荒廃させる勢力が続くというこの二つの構図を、ウィリアム・ミラーは自ら提示したすべての預言の枠組みとして用いた。

彼らは昔の荒れ跡を建て直し、いにしえの荒廃を復興し、代々荒れすたれていた町々を再建する。イザヤ書 61:4

枠組みとして表現される預言の構造とは、その二つの勢力の歴史と相互関係である。「住むべき道」を回復することは、ミラーの枠組みを回復することであり、それは彼の夢の中で塵を払う男の働きによって象徴されていた。イザヤは、バビロンから帰還してエルサレムを修復したエズラと人々の歴史を例として用い、かつての荒廃の回復を示した。

私たちは先祖の時代から今日に至るまで、大いなる背きを犯してきました。その不義のゆえに、私たちも、私たちの王も、祭司たちも、諸国の王たちの手に渡され、剣にかけられ、捕囚となり、略奪に遭い、顔には恥を負わされてきました。今日もそのとおりです。しかし今、しばらくの間、私たちの神、主から恵みが示され、私たちが残りの者として逃れられるようにされ、その聖なる所に杭を打つことが許され、私たちの神が私たちの目を明るくし、奴隷の身にある私たちにわずかな生き返りを与えてくださいました。私たちは奴隷の身でしたが、私たちの神は奴隷の身のうちにあっても私たちを見捨てず、ペルシアの王たちの前で私たちに憐れみを示し、私たちに生き返りを与え、私たちの神の家を建て直し、その荒廃を修復し、ユダとエルサレムに城壁を与えてくださいました。エズラ記 9:7-9。

エズラとエルサレムの修復にあたった人々は、「住むべき道を修復する者」である「残りの者」を表しており、彼らはレビ記26章の祈りの文脈においてその働きを成し遂げている。これについてエズラは次のように言及する。「わたしたちは父祖の時代以来、今日に至るまで大いなる背きの罪のうちにあり、わたしたちの不義のゆえに、わたしたちも、わたしたちの王たちも、祭司たちも、諸国の王たちの手に渡され、剣に、捕囚に、略奪に、そして恥辱に引き渡されてきた」。彼が言うその「日」とは、終わりの時の「残りの者」が住むべき道を修復するその「日」のことである。

エズラの残りの者たちは、三日半ののちに復活する二人の証人であり、ダニエル書九章に示されているとおりにレビ記二十六章の祈りを成就する。エズラとその同労者たちが捕囚から帰還してエルサレムを再建したとき、それはミラーの宝石を回復する働き、すなわちミラーの基礎的な真理を回復する働きの型となった。このため、ミラーの働きの枠組みを理解することは不可欠である。

「使徒たちは、確かな土台、すなわち永遠の岩の上に築いた。彼らはこの土台に、世から切り出した石を据えた。建設者たちの労苦は、妨げのないものではなかった。彼らの働きは、キリストの敵の反対によって、きわめて困難なものとなった。彼らは、偽りの土台の上に建てている者たちの偏狭、偏見、憎しみに立ち向かわなければならなかった。教会の建設者として働いた多くの者は、ネヘミヤの時代に城壁を築いた者たちになぞらえることができる。彼らについては、こう記されている。『城壁を築く者も、荷を運ぶ者も、荷を積む者も、それぞれ片手で仕事をし、もう一方の手には武器を持っていた。』ネヘミヤ記4章17節。」 『使徒行伝』596ページ。

イザヤ書の二つの箇所双方において、なすべき業は、幾世代にもわたる土台を起し、荒れ跡を立て直すことである。イザヤは、文字どおりの働きによって例示された霊的な働きを指し示している。その土台は守られるべきであったが、代わりに、やがては模造の宝石でできた偽りの土台によって完全に覆い隠されてしまった。イザヤが指し示す人々は、文字どおりのれんがや石ではなく、ミラー派の基礎的真理を回復している。これらの真理の象徴は、「七たび」のあいだ聖所と軍勢を踏みにじった二つの荒廃させる勢力に関

するミラーの枠組みである。

その回復の働きは、「礎」を起こし、「多くの世代にわたる荒廃」を立て直すこととして表されており、預言の筋に預言の筋を重ね、ここにも少し、あそこにも少し、という方法論によって基礎的な真理を回復するという預言的な働きを表している。「礎」と「荒廃」を再確立する働きとは、1843年と1850年の先駆者の図表に表された本来の真理を提示し擁護する働きであり、それらはハバクク書2章の二つの板である。

そしてその働きは、「行に行を重ねる」という後の雨の方法論によって成し遂げられる。それは、ミラーの夢の偽の宝石で表されているように、偽りの土台を擁護しようとする者たちとの論争において、エレミヤの「古い道」へと立ち返る働きである。

敵は、この終わりの時に立つ民を備える働きから、私たちの兄弟姉妹の心をそらそうとしている。彼の詭弁は、この時の危険と務めから人々の心を遠ざけるように仕組まれている。彼らは、キリストが天から来て、ヨハネにご自分の民のために与えられた光を、取るに足らないものと見なしている。彼らは、私たちの目の前に迫る出来事は特別な注意を払うほど重要ではないと教える。彼らは天来の真理を無効にし、神の民からこれまでの経験を奪い、その代わりに偽りの科学を与えている。

「主はこう言われる。道に立って見よ、昔からの道を尋ね、どれが良い道かを尋ね、それを歩め。」エレミヤ書6章16節

誰も、私たちの信仰の土台——私たちの働きの初めに、御言葉を祈り深く学び、啓示によって据えられた土台——を引きはがそうとしてはならない。私たちはこの土台の上に、この五十年の間、築き上げてきた。人は、新しい道を見だし、すでに据えられているものよりも強固な土台を据えることができるかとも考えられるかもしれない。しかし、これは大いなる欺瞞である。すでに据えられているもの以外の土台を、人は据えることができない。

過去に多くの人々が、新しい信仰の構築や新しい原理の確立に着手してきた。だが、彼らの築いたものはどれほど長く持ちこたえただろうか。ほどなく倒れた。岩の上に据えられていなかったからである。

初代の弟子たちも、人々の言葉に直面しなければならなかったのではないか。彼らは偽りの理論に耳を傾け、そのうえで、すべてを成し終えて、こう言って堅く立たなければならなかったのではないか。「人はだれも、すでに据えられているもの以外の土台を据えることはできない」。第一コリント 3:11

「それゆえ、私たちは最初の確信を終わりまで堅く保たなければならぬ。力ある言葉が、神とキリストによってこの民に送られ、彼らを世から、一つひとつの点で、現在の真理の澄んだ光の中へと導き出してきた。聖なる火に触れられた唇をもって、神のしもべたちはそのメッセージを宣べ伝えてきた。神の御告げは、宣べ伝えられた真理の真正さにその印を押してきた。」『Testimonies』第8巻、296、297頁。

「終わりの日に立つ民を備える働き」は、エゼキエル書第37章にある二つの預言に結びついた働きである。荒野で叫ぶイザヤの声によって一つのメッセージが告げられ、さらにエゼキエルの第一のメッセージは、三日半の間ソドムとエジプトという都の街路で死んでいた者たちを一つに集める。彼らは、自分たちがマタイ福音書の十人の乙女のたとえに

おける待機の時にいたことを悟る。彼らはまた、もし帰ることを望むなら尊いものと卑しいものを分けるようにとの、エレミヤに与えられた召しを聞く。さらに、ダニエル書第9章の祈りが現在の真理であることも認める。ゆえに、彼らが福音の条件を受け入れてそれを満たすことによって帰ることを選ぶなら、その時彼らはエゼキエルの第二のメッセージを受け、自らの足で立ち上がり、非常に大いなる軍勢となる。

「終わりの日に民が立つことができるように備える働き」は、「行に行」という後の雨の方法によって成し遂げられる。その働きには、1843年と1850年の先駆者の図表に示されているミラー派の真理を回復する働きが含まれている。これら二つの図表はハバククのものであり、互いに重ねて置かれるべきで（「行に行」のとおり）、そうすることによって、この二つの図表は、ちり払いの人によって終わりの日に回復されるべき基礎的な真理を表している。

行に行を重ねて一つにまとめると、それらは1843年の図表にあった誤りを指摘し、その誤りはその後1850年の図表で訂正された。ひとつの表（行に行）として考えるなら、それらは神の民の経験と七つの雷の隠された歴史の両方を表しており、共に最初の失望、遅延の時、真夜中の叫び、1844年10月22日、そして大失望を示している。

七つの雷の隠された歴史とは、最初の失望、真夜半の叫び、そして大失望のことを指す。それは真理の構造である。というのも、ヘブライ語の「真理」という語の最初と最後の文字が対応しているのと同様に、その歴史の最初と最後の失望も対応しており、真理はそこに基づいているからである。中央にある第十三の文字は、真夜半の叫びのメッセージを拒む者たちに象徴される反逆のしるしである。二枚の図表を合わせると、ちり払いの男によって回復されるはずのミラー派の予言的真理に対する二人の証人が立てられるが、同時にそれらは、十四万四千人の経験を型どる経験も指し示している。

旗印となるべく召された者たち（十四万四千人）は、2020年7月18日に初めての失望に直面し、その後2023年7月には、荒野で叫ぶ声からのメッセージが彼らに告げられた。その声は彼らに、立ち帰るよう呼びかけていた。

七つの雷の隠された歴史のこの時点で反逆が現れる。というのも、次の道標は、ちり払いのブラシを持つ男が宝石を集めてそれらを宝石箱に投げ入れる時だからである。するとそれらは十倍明るく輝く。その時、ミラーは目を覚ました。乙女たち（ミラー）が目を覚ますときには、もう手遅れだ。幾世代にもわたる荒廃の回復は、二人の証人が携わらなければならない働きである。その働きは今、進められている。

ダニエル書7章・8章・9章、ウライ川の幻に示された預言に関して、ウィリアム・ミラーが提示した枠組みは、異教主義と教皇制という二つの荒廃させる勢力であった。Future for America の枠組みでは、異教（竜）、次いで教皇制（獣）、そして背教的プロテスタント（偽預言者）である。両方の枠組みを確立する鍵は、使徒パウロの著作である。使徒パウロは、古代イスラエルと霊的イスラエルを結びつけた預言的な声であった。回心以前、パウロの名はサウロであり、その意味は「選ばれた」または「立てられた」である。

パウロは異邦人への使徒として選ばれたが、その理由の一つは彼の旧約聖書に対する理解であった。新約聖書の大半を著した彼ほど旧約聖書を理解していた新約聖書の著者はほ

かにいない。彼は異邦人に福音を告げ知らせる働きで先導するために選ばただけでなく、旧約聖書の預言的歴史と、十字架の時代以後に続く預言的歴史との関係を確立するためにも選ばれた。パウロの証しがなければ、ミラー派の預言理解も、フューチャー・フォー・アメリカの預言理解も存在しなかつたろう。まさに神の選民としての文字どおりのイスラエルが離縁されたその同じ歴史において、パウロは、神から離縁されていたその古代イスラエルが、霊的イスラエルの預言的歴史の象徴であることを明らかにするために選ばれた。第一と第三の天使の運動に不可欠な預言的規則は、主として使徒パウロの著作に基づいている。

このため、パウロによって示され、ミラー派のメッセージに影響を与えたいくつかの預言の原則を考察する。ミラー派のメッセージは二つの荒廃をもたらす勢力という枠組みの中に据えられていたが、あわせて、それらの原則が三つの荒廃をもたらす勢力という枠組みにどのように影響するかについても考える。

さて、兄弟たち、次のことを知らずにいてほしくありません。私たちの先祖は皆、雲の下におり、皆、海を通り抜けました。皆、雲と海でモーセに属するバプテスマを受け、皆、同じ霊的な食物を食べ、皆、同じ霊的な飲み物を飲みました。彼らが飲んだのは、彼らについて来た霊的な岩からであり、その岩はキリストでした。しかし、彼らの多くを神はよしとされませんでした。彼らは荒野で倒されたのです。これらのことは、彼らが欲望に駆られたように私たちが悪いものを慕い求めることのないようにするための、私たちへの模範となりました。また、彼らの中のある者たちのように、偶像礼拝者になってはいけません。「民は座って食べて飲み、立って遊び戯れた」と書いてあります。また、彼らの中のある者たちがしたように、不品行をしてはいけません。一日に二万三千人が倒れました。また、彼らの中のある者たちがしたように、キリストを試みてはなりません。彼らは蛇に滅ぼされました。また、彼らの中のある者たちがつぶやいたように、つぶやいてはなりません。彼らは滅ぼす者によって滅ぼされました。これらすべてのことは彼らに起こった戒めの実例であり、時代の終わりが私たちに及んでいる今、私たちが戒めるために書き記されたのです。コリント人への第一の手紙 10章1-10節

わずか十節の中で、パウロは、洗礼の儀式が紅海の渡過において予表されていたこと、古代イスラエルに付き従った岩は「霊的な岩」であり、それがキリストであったことを指摘している。彼はまた、古代イスラエルが終わりの時代に生きる人々のための模範であることを明らかにする。この箇所は警告であり、真理を擁護する者と真理に反対する者との間の論争点でもある。アドベンチストの神学者たちは、パウロは単に、古代イスラエルの歴史が終わりの時代に生きる人々が理解すべき道徳的教訓を示していると述べているにすぎず、文字どおりのイスラエルの歴史が霊的イスラエルによって実際に繰り返されるとパウロが示しているのではないと強調する。ホワイト夫人はしばしばこの箇所を用いて、パウロの真意をまさに裏づけている。

「古代の預言者たちは、それぞれ自分たちの時代のためというよりも、むしろ私たちの時代のために語ったのであり、したがって彼らの預言は私たちに対して効力を有している。『これらの事は皆、彼らに対する戒めの実例として起こり、そして世の終わりに臨んでいる私たちへの警告のために書き記されたのである。』コリント人への第一の手紙 10:11。『彼らは、自分たちのためではなく、あなたがたのためにそれらの事

に仕えていたのであり、それらの事は、天から遣わされた聖霊によってあなたがたに福音を宣べ伝えた人々を通して、今やあなたがたに告げ知らされたのである。御使いたちも、これらの事をうかがい見たいと願っている。』ペテロの第一の手紙 1:12. …」

「聖書は、この最後の世代のために、その宝を蓄え、ひとまとめに束ねてきた。旧約聖書の歴史におけるすべての偉大な出来事と厳粛な事柄は、この終わりの時代の教会において、これまでも、そして今もなお、繰り返されている。」『セレクトッド・メッセージズ』第3巻、338、339頁。

「旧約聖書の歴史における偉大な出来事と厳粛な経緯は、これまでも、そして今も、この終わりの時代の教会において繰り返されている」—これが、該当箇所におけるパウロの意味をシスター・ホワイトが要約した言い方である。古代イスラエルが文字通りのイスラエルの歴史を象徴的に示しているとするパウロの見解を弱めようとして、サタンはこの予言的原則に対して二つの主要な攻撃を仕掛けてきた。第一に、すでに述べたように、パウロはそれらの歴史が道徳的教訓を表していると単に指摘しているにすぎない、という主張である。その誤った教えは半分だけ真実であり、半分の真実は真実ではない。古代イスラエルの歴史から引き出されうる道徳的教訓が終わりの時代に生きる人々の益となるのは確かであるが、それをもって、それらの歴史がまた、繰り返される出来事の例証でもあることを否定するために用いるなら、それは真理を否定するために仕組まれた半分の真実となってしまう。

神の民の前には今、祝福か呪いかがか置かれている—もし彼らが世から出て分かれ、へりくだった従順の道を歩むなら祝福があり、天の崇高な要求を踏みじじる偶像礼拝者と結びつくなら呪いがある。反逆のイスラエルの罪と不義は記録され、私たちの前に警告として示されている。もし私たちが彼らの背きの例に倣い、神から離れるなら、彼らと同じように確実に倒れるであろう。「これらの事が彼らに起こったのは模範のためであり、世の終わりが臨んでいる私たちの戒めのために書かれているのである。」『証言』第1巻、609頁。

一つの真理をもって別の真理を否定してはならない。そうすると、神の真理を偽りに変えてしまうからである。

「救い主の一つの御言葉を、別の御言葉を打ち消すために用いてはならない。」『大論争』371頁

古代イスラエルの歴史は単なる道徳的教訓にすぎないとする教えは、神の預言の御言葉を破壊するためにアドベンチストの神学者によってしばしば用いられており、神の民を欺いて偽りを受け入れさせるために用意された作り話という料理に混ぜ込まれた半分の真理の一つであり、彼らが受け入れるその偽りは使徒パウロの著作の中で明らかにされている。

古代イスラエルの歴史が現代イスラエルの歴史を示しているという原則に対するもう一つの主要な攻撃は、反宗教改革期にイエズス会によって考案されたものであり、その骨子は、古代イスラエルの歴史は繰り返されるという考えを認めることにある。イエズス会の虚偽は、その歴史が霊的にではなく文字どおりに繰り返されるとする点にある。この虚

偽は、ローマの教皇が聖書の預言における反キリストであるという理解を妨げるために作り出された。というのも、その教えは終わりの日に反キリストがいるという真理には同意するが、反キリストは霊的な力ではなく現実の権力によって表されるのだと主張するからである。すると、額に「奥義バビロン」と記された黙示録17章の淫婦は、今日のイラクに当たる文字どおりのバビロンの地に現れる淫婦だということになる。

「言葉についての理解が混乱し、反キリストの意味を見抜けない者は、必ずや自らを反キリストの側に置くことになる。」 クレス・コレクション、105.

教皇は（カトリック教会という）文字どおりの権力を代表する、文字どおりの人物である。しかし、彼とその組織は、預言において「文字どおりのバビロン」として特定されており、反キリストの主題が、文字どおりの事例の霊的成就として提示されるときにのみ、正しく識別できる。パウロは、文字どおりのイスラエルが霊的イスラエルを例証していることを明らかにしたが、彼が提示したのは新しい預言的真理ではなかった。というのも、彼の理解は概して旧約聖書に基づいており、彼の証言の根拠もそこにあるからである。

イスラエルの王、彼の贖い主である万軍の主はこう言われる。「わたしは初めであり、わたしは終わりである。わたしのほかに神はない。わたしのように呼ばわり、これを告げ、わたしのために整える者はだれか。わたしがいにしへの民を定めた時からのことだ。来たるべき事ども、これから起こる事どもを彼らに示してみよ。恐れるな。おののくな。わたしがその時からあなたに告げ、これを知らせたではないか。あなたがたはまさにわたしの証人である。わたしのほかに神があるか。いや、ほかに神はない。わたしは知らない。」 イザヤ書 44:6-8

私たちは、パウロがそうであったように、キリストの証人となるべきです。アルファでありオメガである方は、古代イスラエルだけでなく、聖書に登場する古代のすべての民を、終わりの日に生きる者たちに臨む「これから起こる事柄」を示す象徴としてお定めになりました。パウロは旧約聖書に精通した学者であり、文字通りのイスラエルの時代と霊的イスラエルの時代とをつなぐ預言的な架け橋として立てられました。1798年の終わりの時に、また1989年にも、知識の増大を理解した人々を導いたのは、彼の著作でした。

古代の歴史的バビロン、古代の東方の民、古代エジプト、古代ギリシア、そして古代メディア・ペルシア帝国は、世の終わりにおける霊的な勢力の象徴である。こうした古代の象徴は、先行する文字通りの事柄であり、その後続く霊的な事柄を表している。パウロは、文字通りのアダムが霊的なアダム（すなわちキリスト）を象徴していたとまで述べている。

このように書かれている。「最初の人アダムは生きた魂となった。」最後のアダムは命を与える霊となった。とはいえ、最初にあるのは霊的なものではなく自然のものであり、その後霊的なものが来る。最初の人とは地から出た者で、土に属する者である。第二の人は天から来られた主である。土に属する者がそうであるように、土に属する者たちもそのようであり、天に属する者がそうであるように、天に属する者たちもそのようである。そして、私たちが土に属する者のかたちを帯びたように、天に属する者のかたちもまた帯びるであろう。コリント人への第一の手紙 15:45-49.

パウロは第一のアダムと最後のアダムについて非常に深遠な教えをしています。私たちは、彼がその箇所ですべて非常に明確に示している原則を単に指摘しているだけです。すなわち、「先なのは霊のものではなく、自然のものであり、その後には霊のものが来る」ということです。ここでパウロが「自然」と呼んでいるのは字義どおりのもので、それが先で、霊的なものは後です。字義どおりのイスラエルがまずあり、それは自然のもので、霊的なイスラエルは「その後」に來ます。

文字通りのバビロンは霊的なバビロンに先行する。パウロの書簡で強調されている次の重要な点は、文字通りから霊的への転換がいつ適用されるのかという歴史上の時点である。それは、預言における文字通りから霊的への転換が示される、十字架の時期である。

あなたがたは皆、キリスト・イエスを信じる信仰によって神の子です。キリストにおいて洗礼を受けたあなたがたは皆、キリストを身にまとったのです。そこにはユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからです。そして、もしあなたがたがキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人です。ガラテヤ人への手紙 3:26-29。

あなたの生まれながらの身分が何であろうと問題ではありません。もしあなたがキリストを受け入れるなら、そのときあなたはアブラハムの子孫となるのです。あなたは肉によるイスラエルではなく、霊によるイスラエルです。肉によるものから霊的なものへの転換点は十字架でした。パウロは人類を二つのグループに分けています。各グループにはそれぞれ固有の契約があり、どちらもアブラハムの子孫です。それぞれには自分たちの家系と契約を象徴する都があります。人はそれぞれ、肉のアダムの子か霊のアダムの子かのどちらかです。

なぜなら、こう書いてある。アブラハムには二人の息子がいた。一人は奴隷の女から、もう一人は自由の女からであった。だが、奴隷の女からの者は肉によって生まれ、自由の女からの者は約束によって生まれた。これらは比喩であって、二つの契約を指している。一つはシナイ山から出て奴隷となる子を生むもので、これはアガルである。このアガルはアラビアのシナイ山に当たり、今あるエルサレムに対応しており、彼女はその子らとともに奴隷の身にある。だが、上にあるエルサレムは自由であり、私たちすべての母である。こう書いてあるからである。「子を産まない不妊の女よ、喜べ。産みの苦しみをしていない者よ、歓声を上げて叫べ。見捨てられた女は、夫のある女よりもはるかに多くの子を持つからだ。」さて、兄弟たちよ、私たちはイサクのように約束の子らである。しかし、そのとき肉によって生まれた者が、御霊によって生まれた者を迫害したように、今も同じである。それでも、聖書は何と言っているか。「奴隷の女とその子を追いつせ。奴隷の女の息子は、自由の女の息子と一緒に相続人となることはない。」このようにして、兄弟たちよ、私たちは奴隷の女の子らではなく、自由の女の子らである。ガラテヤ 4:22-30。

十字架の時代において、古代の文字どおりの事柄は、現代の霊的な事柄の象徴となった。使徒パウロはこれらの不可欠な預言的真理を明らかにし、そのことによってWilliam Millerが二つの荒廃させる勢力の枠組みを確立することを可能にした。彼は自らのすべての預言的結論をその枠組みに基づかせた。使徒パウロが成し遂げたのと同じ働きこそが、Fu

ture for Americaのすべての預言的結論の枠組みである三つの荒廃させる勢力を識別するものである。

第七、八、九章のウライ川の幻が示す知識の増大についてのミラーの理解の枠組みは、ダニエル書における「the daily」が異教ローマを表しているという彼の発見に基づいていた。彼はその発見をパウロのテサロニケ人への第二の手紙の中で得た。その理解は、預言的な「嘘」と関連して特定される主要な真理であり、その「嘘」は終わりの時代にセブンスデー・アドベンチストに強い惑わしをもたらすものである。

次の記事では、ミラーがパウロの手紙の中で見出したことを考察することによって、ウライ川の幻に表されている知識の増大についての研究を続けます。

表面に現れたことの背後を見通し、すべての人の心を読み取る方は、大いなる光を受けた者たちについてこう言われる。「彼らは自らの道徳的・霊的状态のゆえに悩み苦しむ、驚いているのではない。まことに、彼らは自分自身の道を選び、その魂は彼らの忌むべき行いを喜んでいる。わたしもまた彼らの惑いを選び、彼らにその恐れを臨ませる。わたしが呼んだとき、答える者はひとりもおらず、わたしが語ったとき、彼らは聞かなかった。しかし、彼らはわたしの目の前で悪を行い、わたしの喜ばないことを選んだ。」

「神は彼らに強い惑わしを送り、彼らが偽りを信じるようにされる。」

「彼らが救われるために真理への愛を受け入れなかったからである。」

「しかし、不義を喜んだ。」

イザヤ書66:3、4;テサロニケ人への第二の手紙2:11、10、12.

天の教師は問いかけた。「実際には世の方策に従って多くの事柄を取り計らい、エホバに対して罪を犯しているのに、正しい土台の上に建てており、神があなたの行いを受け入れておられるという見せかけにまさる、心を惑わす強い迷いがほかにあるだろうか。ああ、なんと大いなる欺き、魅惑的な迷妄であることか。かつて真理を知った者たちが、敬虔のかたちをその霊と力と取り違え、自分は富み、財を増し、何一つ必要がないと思い込みながら、実のところはすべてを必要としているとき、その迷いは人の心をとらえてしまうのだ。」『証言』第8巻、249、250頁。